

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する幻の匂い（前編）

石井竹夫

帝京平成大学薬学部
e-mail : t.ishii@thu.ac.jp

Olfactory Hallucination Appeared in “Night on the Milky Way Train” Written by Kenji Miyazawa (The First Part)

Takeo ISHII

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Teikyo Heisei University

キーワード：文学と植物のかかわり，苹果，野茨，ばら，共感覚，幻嗅

匂いが快感や不快感を誘起したり，食欲増進やリフレッシュ効果（リラククス効果）をもたらすことはよく知られている。これら匂いや香りの性質から，近年匂いは教育，産業及び医療などさまざまな分野で注目されるようになった。しかし，米国での調査によると65歳以下の人口の1%，65歳以上では50%以上の人何らかの嗅覚障害を有することが報告されている（坪田ら，2005）。嗅覚障害には，匂いを全く感じない嗅覚脱失，匂いの感じ方が正常よりも弱い嗅覚減退，匂いの感じ方が正常よりも強い嗅覚過敏，及び匂い物質が存在しないにもかかわらず匂いを感じる嗅覚幻覚（幻嗅）などが知られている（坪田ら，2005）。嗅覚過敏は妊娠時に見られることがある。また，神経症・ヒステリー，統合失調症，薬物中毒などの心因性・精神障害で嗅覚過敏や幻嗅などの症状を引き起こすことも知られている（洲崎，1995）。

1. 銀河はバラの匂いがする

賢治の作品の中には，匂い（特に植物の匂い）に関する記載が多い。しかし，その中に嗅覚障害を疑わせる記載も少なくない（板谷，1990，1999，2000）。童話『銀河鉄道の夜』で存在しないはずの「苹果」や「野茨」の匂いがしてくる場面がある。最初に断わっておくが，『銀河鉄道の夜』は主人公のジョバンニが黒い丘で入眠し，夢の中で銀河を旅する物語である。よって，夢の中の登場人物の感じる感覚に対して，正覚か幻覚かを論じるのは矛盾のようにも思えるが，ここでは夢の中の世界を現実を起こっている出来事と仮定して話を進めたい。『銀河鉄道の夜』は大正13年（1924年）頃に第一次稿が書かれるが，その後推敲を重ね現在第四次稿までの文章が残っている。嗅覚障害を疑わせる記述が登場するのは第二次稿からである。第二次稿には以下のような記述がある。

「何だか苹果（りんご）の匂い（におひ）がする。僕はいま苹果のことを考へたためだらうか。」カムパネルラが不思議さうにあたりを見まはしました。

「ほんたうに苹果の匂いだよ。それから野茨（のいばら）の匂いもする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂いのする筈（はず）はないとジョバンニは思ひました。

そしたら俄（には）かにそこに，つやつやした黒い髪の六つばかりの男の子がひどくびくりにしたやうな顔をしてはだして立ってゐました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれてゐるけやきの木のやうな姿勢で，男の子の手をしっかりとひいて立ってゐました。

「あら，こゝどこでせう。まあ，きれい。」青年のうしろに姉妹らしい三人の少女がお互みんな堅く手をつないでジョバンニのうしろに立ち，不思議さうに窓の外を見てゐるのでした。

（中略）

「あなたそこへお掛けなさい。」眼のまっ黒な，まん中に居た女の子に，青年はカムパネルラのと成りの席を指さして云ひました。女の子はすなほにそこへ座って，きちんと両手を組み合せました。

（中略）

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光（りんくわう）の川の岸を進みました。向ふの方の窓をみると，野原はまるで幻燈のやうでした。百も千もの大小さまざまの三角標，その大きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見え，野原のはてはそれらがいちめん，たくさんたくさん集ってぼおっと青白い霧のやう，そこからかまたはもっと向ふからかときどきさまざまの形のほんやりした狼煙（のろし）のやうなものが，かはるがはる

2012年10月22日受付。

きれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとほった綺麗な風は、ばらの匂い (にほひ) でいっぱいでした。

「あら、お姉さん、苹果もっているわ。」向ふの席のいちばんちいさな女の子がびっくりしたやうに叫びました。「え、さっきから持ってゐたわ。みんなで五つあるのよ。」その髪の黒い姉は、黄金(きん)と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないやうに両手で膝(ひざ)の上のかへてゐました。

(中略)

「まあ、あの鳥。」カムパネルラのとなりの女の子が叫びました。

(『銀河鉄道の夜』第二次稿 宮沢賢治, 1986)
下線は著者

この場面では、新たに氷山と衝突して遭難したキリスト教徒(男の子、三人姉妹及び家庭教師の青年の5人)が乗車してくるときに「苹果」や「野茨」の匂がするのだが、主人公とカムパネルラには「苹果」も「野茨」も見つけることはできない。しかし、銀河鉄道の列車が暫く進行していくと、「ばらの匂い」でいっぱいな場所を通過していくと同時に遭難した三人姉妹の一人(姉)がいつのまにか苹果を抱えている。

2. 匂が生じた理由

最初に存在しないはずの「苹果」や「野茨」の匂がなぜ生じたかに対しては、二通りの解釈が可能である。一つ目は、ジョバンニとカムパネルラの2人の嗅覚が非常に過敏であり、進行方向の先にある「ばら」あるいは姉妹が隠し持っていたかもしれない「苹果」の匂を感じる事が出来たということ。二つ目は2人が「匂い物質が存在しないにもかかわらず匂う」と言うまさに「幻の匂い=幻嗅」そのものを体験したということである。この場合は、単なる幻嗅体験ではなく2人が同時に予知能力という特殊な超越的感覚を持ち合わせているということも暗示している。予知とは、時系列的にみて、その時点では発生していない事らについて予め知ることである。経験則や情報による確定的な予測とは異なる。すなわち、匂いを体験したときに「苹果」や「ばら」の放つ匂い物質が2人に届いていなかったとすれば、進行先の未来の出来事をまさしく予知したことになる。また、なぜ「苹果」や「野茨」や「ばら」の匂いなのかに関しては、新たに乗車してくる人達がキリスト教徒であることから、キリスト教を象徴するメタファー(たとえの形式をとらない比喩)としての「苹果」や「ばら」を登場させたということが考えられる。リンゴはキリスト教にとって「原罪」の象徴であり、バラの花は聖母マリアを象徴する。実際、キリスト教絵画の中にはリンゴやバラが登場する。

3. 「苹果」、「野茨」及び「ばら」を特定する

苹果：まずは物語で存在が確認できる「苹果」について説明する。リンゴは「林檎」と「苹果」の二つの表記方法があるが、賢治は『銀河鉄道の夜』の中では後者の「苹果」を使っている。「林檎」は西洋リンゴ輸入前の小粒の和リンゴの総称で、西洋リンゴ(バラ科リンゴ属; *Malus pumila*)の表記は「苹果」であった(原, 1999)。明治時代以来の代表的な西洋リンゴの品種は、「国光」と「紅玉」であった。「国光」の果皮は黒ずんだ赤色であるが、「紅玉」はその名の通り艶やかな「深紅」のリンゴで芳香を放つ。多分、賢治が本文で記載した「苹果」は「紅玉」をイメージしたものかもしれない。

ばら：「ばら」も物語の語り手によって「じつにそのすきとほった綺麗な風は、ばらの匂いでいっぱいでした」とあるので、「ばら」の姿は見えないが「匂い」は確かに存在している。汽車が暫く移動してから現れるこのバラは、本文では「ばら」としか表現されておらず、その種を特定するのは難しいが、銀河鉄道沿線から匂ってくるので園芸品種(西洋バラ)ではなく野生のバラであろう。銀河鉄道の汽車は銀河に広がる野原や林や森の中を走るからである。賢治の童話『よく利く薬とえらい薬』でも森の中に自生する「ばら」が登場するが、童話では語り手によって「野ばら」と説明される。野生のバラはノイバラ(バラ科バラ属; *Rosa mutiflora*)が一般的であるが、賢治が「野ばら」と表現するとノイバラだけでなくバラ科のキイチゴ属を示すことがある。例えば、賢治の『春と修羅』の中の詩「習作」には、「野ばらが咲いてゐる 白花/秋には熟したいちごにもなり/硝子のやうな実にもなる野ばらも花だ(1922.5.14)」とある。この木苺は、我が国でごく普通に見られるモミジイチゴ(*Rubus palmatus* var. *coptophyllus*; 果実は球形で茶色を帯びたオレンジ色、米国ではGolden mayberryと呼ぶ)のようなものであると思われる。欧州の木苺はラズベリー(*Rubus idaeus*)と呼ぶ。ラズベリーの中には香りの強いものもある(香り成分:ラズベリーケトン, ギ酸エチルなど)。ノイバラもモミジイチゴも花期は3~5月である。しかし、物語の季節は秋であるので「野ばら」の香りは花ではなく実から出たのであろう。モミジイチゴの実が熟するのは初夏であるので、物語の「ばら」がモミジイチゴを想定したものとすると、モミジイチゴの実が秋まで残っていたことになる。少し、違和感もあるので他のキイチゴを探してみた。モミジイチゴ以外では、深山に生えるミヤマモミジイチゴ(*Rubus pseudo-acer*)というのがあるが、これはモミジイチゴよりも花期が遅く実も秋に熟す。「インディアンサマー」(*Rubus idaeus* ssp. *idaeus*)のような欧州の木苺(ラズベリー)も秋に実が熟す。

物語の「ばら」は木苺のことであろう。童話『よく利く薬とえらい薬』に登場する「ばら」も木苺である(石井, 2004)。ノイバラの実はいじつ(苺)と呼び瀉下剤などに使うが匂いは弱い。一方、木苺やラズベリーは食用にしたりジャムにするぐらいだから匂いは存在する。甘酸っぱい匂いだそうだ。最近、興味ある事実が報告された。ドイツにあるマックス・プランク電波天文学研究所の研究グループが、天の川銀河の中心部に近い分子雲「射手座B2」内に「ギ酸エチルethyl formate」が存在することを発見した。すなわち、銀河の射手座付近はラズベリー(ギ酸エチルが匂いの主要成分の一つ)の匂いがする(Nature Research Center, 2012)。偶然の一致だろうか、『銀河鉄道の夜』に登場する「ばらの匂いでいっぱいでした」という記述は、銀河鉄道が「鷲座」から「射手座」へ向かう途中で現れる。賢治は射手座付近に木苺の匂い成分が発見されることを80年前に予知していた(?)。射手座付近でなくても、宇宙には独特の匂いがあるらしい。地球の軌道を回る宇宙飛行士が、船外活動を終えて船内に戻ってきた仲間の飛行士の宇宙服から独特の甘い匂いを感じるということも報告されている。すなわち、嗅覚過敏説をとれば、ジョバンニとカンパネラは苹果(たぶん「紅玉」と木苺(秋成りのキイチゴ)の実が放出するわずかな匂い分子を鼻腔で受け取り、「苹果」の匂と「野茨」の匂がすると表現したのであろう。

野茨:「野茨」の匂いは、ジョバンニとカンパネラの二人がただ感じただけなので、あえて匂いの本体を解明する必要はないと思われるが、そのまま植物図鑑と照らし合わせれば、「野茨」はバラ科バラ属のノイバラ(*Rosa mutiflora*)を指すと思われる。しかし、ノイバラは春に花が咲くので秋に花の匂いがするのは矛盾である。物語でも、ジョバンニが「いま秋だから野茨の花の匂のする筈はない」と自ら「野茨」の存在を否定している。すなわち、野茨は存在しない。しかし、なぜ「野茨」を「野ばら」あるいは木苺としなかったかは疑問が残る。もしかしたら、キリストが処刑されたときの「茨の冠」をイメージしたのかもしれない。

4. 賢治の嗅覚過敏と幻嗅体験

私は、賢治の作品の多くが自らの体験を基に創作されていると確信している。それゆえ、この『銀河鉄道の夜』における匂いが嗅覚過敏あるいは予知を伴った幻嗅によるものであるとすれば、賢治の体験の裏付けがあると思っている。賢治の性格、資質、病理に関して言及している論文あるいは著書も少なくない。賢治は、盛岡中学校を卒業した後(1914年4月)、岩手病院(現在の岩手医科大学付属病院)で肥厚性鼻炎の手

術をするが、手術後に高熱に苦しみ発疹チフスの疑いで長期間(2か月間)入院することになる(宮沢賢治を愛する会, 1996)。賢治は、入院中の高熱の中でさまざまな「幻夢」を経験したそうだ。また退院後も「幻覚」だけでなく「感覚過敏」が激しくなり、自ら体験した超感覚世界を心象スケッチとして短歌、詩、童話の中に取り入れたという。こうした賢治の病理及び幻想感覚に関しては板谷(1990, 1999, 2000)の著書に詳しく記載されている。例えば、板谷(2000)は、「苹果」の幻嗅を表現している短歌として「いざよひの／月はつめたきくだもの／匂をはなちあらはれけり」を挙げている。「苹果」という言葉はでてこないが、「くだもの」が「苹果」以外には考えにくく、短歌の字数の関係で四字の「くだもの」にしたと推定している。さらに、童話『双子の星』(1918)には「今は、空は、りんごのいゝ匂(にはほひ)で一杯です。西の空は消え残った銀色のお月様が吐いたのです。」の記載もある。賢治は月を見たり、月の光を浴びると同時に「苹果」の匂いを感じるという特殊な感覚の持ち主なのだ。形から匂いを感じたりする以外に、文字に色を感じたり、音に色を感じたり、あるいは形に味を感じたりすることを共感覚と呼ぶ。『銀河鉄道の夜』の「蠍の火」の逸話の後には、「その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云へずにぎやかなさまざまな楽の音や草花の匂(にはほひ)のやうなもの口笛や人々のざわざわ云ふ声やらを聞きました」とある。「草花の匂いを聞く」と表現している。この種の共感覚的な表現は賢治の作品に多い。賢治を共感覚者の一人に挙げられている研究者もいるくらいだ。

また、賢治の主治医でもあった佐藤(1994)の著書に次のような嗅覚過敏あるいは予知を伴った幻覚体験を思わせるエピソードも記載されている。

生徒を伴って山に行きます。賢治さんは「炭を焼いている臭いがする。」と言う。しかし何の香りも生徒には感じられません。

「そうですか。」と答えていくうちに山の中の炭焼窯に到着します。

野路を行く。

「杏の花の香りがすると言う。」しばらくすると白い杏の花を見る。生徒は宮沢先生の感覚の鋭敏さのなみなみでないのに驚きます。

また、ある時、賢治が佐藤師という某寺の住職に「僕がチャイコフスキー作曲の交響楽をレコードで聞いていた時、その音楽の中から『私はモスコ音楽院の講師であります』ということばがはっきり聞きました。そこですぐに音楽百科事典を調べてみたら、その作曲の年はやはり、チャイコフスキーがその職にあった年だったのです」と

語りました。

『宮沢賢治－素顔のわが友－』 佐藤隆房)

第1表. リンゴの香気成分.

エステル類	Ethyl acetate n-Butyl acetate n-Amyl acetate n-Hexyl acetate n-Hexyl n-butyrate など n-Hexyl isovalerate n-Caproic acid n-hexyl ester
アルコール類	Isobutyl alcohol n-Hexyl alcohol β-Phenethyl alcohol など
アルデヒド類	trans-2-Hexenal
酸類	n-Caproic acid

奈良岡 (2006) の論文を基にまとめた。

すなわち、このエピソードの前半部分を嗅覚過敏から考察すれば、炭を焼いて生じる匂い成分の分子あるいは杏の花から出る匂い成分の分子の微量が空气中を漂い、敏感になった賢治の鼻の奥の匂いを感じる細胞(嗅細胞)に到達して、生徒達には感じない匂いを感じ取ったということになる。嗅細胞は人間の身体の中かで、一番感応しやすい細胞で、ほとんどの揮発性の物質に感応し、しかも数分子あれば感応する場合もあるという。炭の匂い成分は知らないが、杏の匂いはベンズアルデヒドである(杏仁豆腐の匂い)。ちなみに、リンゴの実やバラの花では匂い分子は、エチルアセテートなどのエステル(第1表)やアルコールのゲラニオールである(奈良岡, 2006; 澁谷・市川, 2007)。しかし、佐藤(1994)が記載した賢治の嗅覚に関するエピソードが、炭を焼いて生じる匂い分子、杏の花から出る匂い分子が賢治の鼻の嗅細胞に一分子たりとも到達していないというのが前提になっているとすれば、考えにくいことだが予知を伴った幻嗅を考えるしかない。また、賢治が住職に話したとされるレコードに関する逸話が正確に主治医の佐藤隆房に伝わっていたとすれば、予知(?)を伴った幻聴であろう。しかし、これらエピソードからだけでは、依然として『銀河鉄道の夜』に登場する「苹果」や「野茨」の匂いが、嗅覚過敏を想定してのものか、予知を伴った幻嗅を想定してのものなのかを判断することは出来ない。しかし、匂いの元が「苹果」や「ばら=木苺)」であるのは、

匂いがした後に乗車してくるキリスト教徒と関係していることは確かであろう。また、匂い自体に関して、賢治の特殊な感覚体験(共感覚, 予知, 感覚過敏, 幻覚)に基づいていることも間違いないだろう。では、『銀河鉄道の夜』の「苹果」の匂や「野茨」の匂が、主人公達の嗅覚過敏によるものか、あるいは予知を伴った幻覚(幻嗅)によるものかを明らかにしていきたい。

(後篇に続く。)

引用文献

- 原 子朗. 1999. 新宮沢賢治語彙辞典. 東京書籍. 東京.
- 板谷栄城. 1990. 宮沢賢治の見た心象～田園の風と光の中から. 日本放送出版協会. 東京.
- 板谷栄城. 1999. 宮沢賢治の、短歌のような 幻想感覚を読み解く. 日本放送出版協会. 東京.
- 板谷栄城. 2000. 宮沢賢治 美しい幻想感覚の世界. でのぼう出版. 神奈川.
- 宮沢賢治. 1986. 文庫版宮沢賢治全集10巻. 筑摩書房. 東京.
- 宮沢賢治を愛する会 編集. 1996. 宮沢賢治 エピソード313. 扶桑社. 東京.
- 奈良岡 馨. 2006. りんご香気の生理的機能性に関する研究. pp.99-103. 青森県総合工業センター(編). 平成18年度青森県総合工業センター事業報告書. Nature Research Center, 2012.9.7. (調べた日付) The center of galaxy tastes like raspberries.<http://naturalsciences.org/nature-research-center/how-do-we-know/raspberries>
- 佐藤隆房(佐藤 進 編). 1994. 宮沢賢治－素顔のわが友－. 桜地人館. 岩手県.
- 澁谷達明・市川真澄(編). 2007. 匂いと香りの科学. 朝倉書店. 東京.
- 洲崎春海. 1995. 嗅覚障害とその治療. 総合臨床 44(10): 2503-2504.
- 坪田雅仁・西条寿夫・矢田幸博・小野武年. 2005. 嗅覚障害. 医学のあゆみ 214(9): 757-762.